

京都の生協

No. **23**

- ひとときトーク——陣内十三子さん
- カメラルポ——高齢者事業団の活動を追って——
- 連載——あなたも地球協同組人

発行/京都市生活協同組合連合会 November ● 1991

〒604 京都市中京区烏丸二条角 西和ビル 6F
TEL. 075-251-1551 FAX. 075-251-1555

生きる。 黒沢明の『生きる』は死を知ってしまった人間の生き様を描いて文句なく名作。スタインベックの「人間は、この宇宙における、有機物、無機物を問わず、ほかのどんなものとも違って、自分の考えの階段を踏みのぼり、自分のなしとげたものかなたに立ちあらわれるものだ」(『怒りのぶどう』)は、人間の可能性への信頼にあふれて至言。とはいえ「人は頭で生きる

というが、頭だけでは、まだ足りぬ。まあ、やってごらんよお前の頭で、生かせるものは、シラミー一匹」(プレヒト『三文オペラ』)も、自らを見つめて納得の台詞。

台所の奥で眠らせていた野菜から、いつの間にか出てきた新しい生命。「わたしたちは、いわば、二回この世に生まれる。一回目は存在するために、二回目は生きるために」というウルソーの言葉(『エミール』)に従って、しばし「生きる」ことを考えました。



基本的なことが欠落していないか？



京都府立医科大学・府立大学生活協同組合理事長 菅原 司

活字の洪水やテレビの氾濫の今日、何を書いても唱えてもまたたく間に押し流される上、周波数も合わなくなっている、むなしさ・はかなさが先に立って奏えてしまう。気力をふりしぼってこの原稿依頼に応えることにする。

○ 最近私には、中国について感動した体験が2つあった。一つは、去る9月初めに基礎医学研究の交流（第2回日中組織細胞化学セミナー）で、西安を訪れた時。無意味な派手なパーティなしの学術重視のセミナー、生き生きとした熱心な基礎研究者との討論、心のこもった友好的なもてなし、などに、こちらでも思わず学術に熱がこもる。また、1週間の短い旅行だったが、私には初めての中国ゆえ、いろいろ感じる所があった。まず、朝5時前から多くの人々が自転車で出勤する（自転車による片道1時間などものともしない！）姿に、日本では薄れてきた「勤勉さ」を鮮烈に感じた事。そして壮大な規模の歴史博物館で、中国には約500万年もの人類の歴史があると知って圧倒された事。わが国が欧米文明を積極的に学び始めたのは、わずか124年前の明治維新から過ぎず、30cmモノサシをこの長い歴史にたとえると、124年などは鉛筆で打つ点にもならない！ さらにわが国では「漢字文化」、「オハシを使う国」などと言うように、中国から長期間学んだことが日本文化の基盤の大部分を“形作っている”のに中国人の大きな、ゆったりした心に欠けるではないか。

○ もう一つは、私達の研究室にこの10月から「日中医学協会」（笹川医学奨学金制度）の留学生として北京から女医さん（素直な美人！）が来室して、開口一番、「一日も早く先生のお手伝いをしてお役に立ちたい。」と、明確な日本語と真剣な眼差しで告げられた時。たった3カ月の日本語研修でびっくりするほどきれいな日本語と日本人の心を表現できるとは（欧米への日本人の留学生のほとんどは、こんな心をこんなに明確に「英語」で言えないだろう）。以来、この留学生の女医さんは、「基礎研究が一番大切だと思います。」と言って、休日・祭日も休まず、毎日目を輝かせて基礎病理学の研究室に通っている。蛇足ながら、彼女の進歩は速い。

○ 私の近ごろの疑問は、「まだ納得できる社会になっていないのに、休日を増やし続けてよいのか？」（週休2日制+祭日で、一年を通じて3日に1日が休みになる！）、『「他人と共に幸せに生きる」優しい心のない国でよいのか？』、「人為的恐ろさがなければ（＝規則違反が発覚しなければ）、神をも恐れぬルール違反を一般化してもよいのか？』、「自分中心・自国中心のお金至上主義で世の中が成り立つのか？』、「『勉強は受験勉強』の子育てで、次世代を造れるのか？』、「科学（基礎研究）よりモノ作り優先が先進国か？』、「合理性や科学を重視しなくても、西欧型の近代国家か？』、「何のための国際化と考えるのか？』、「流行に沿わない意見を異端視する国で、個性・創造性を伸ばせるのか？』……。

○ 「平和と暮らしを守る」と唱える生協に、この「特殊な日本の事情」を踏まえ、「基本的な事柄」、それに「全体観」を大切にして、「人類の一員としてどうあるべきか」の原点から取り組んでもらいたいと願う。この願いがむなしくならないように。

CONTENTS

- 11 ひとときトーク——料理研究家・陣内十三子さん
 - 5 91国際協同組合デー京都集会ひらく
 - 6 ゴミ減量化討論集会
 - 7 府連設立40年記念シンポ「環境問題—アジアと日本」
 - 8 カメラルポ——高齢者事業団の活動を追って——
 - 10 連載(5)あなたも地球協同組合人
 - 12 訪問看護を年間のべ600回——乙訓生協
 - 13 「高齢者眼科検診制度の実現をめざす会」が発足
 - 14 「太平洋戦争」開戦50周年と「平和のための京都の戦争展」
 - 16 発泡スチロールトレイ回収運動——中間報告
- 気になるこの本『1800冊の戦争』



ゲスト

料理研究家

陣内十三子さん

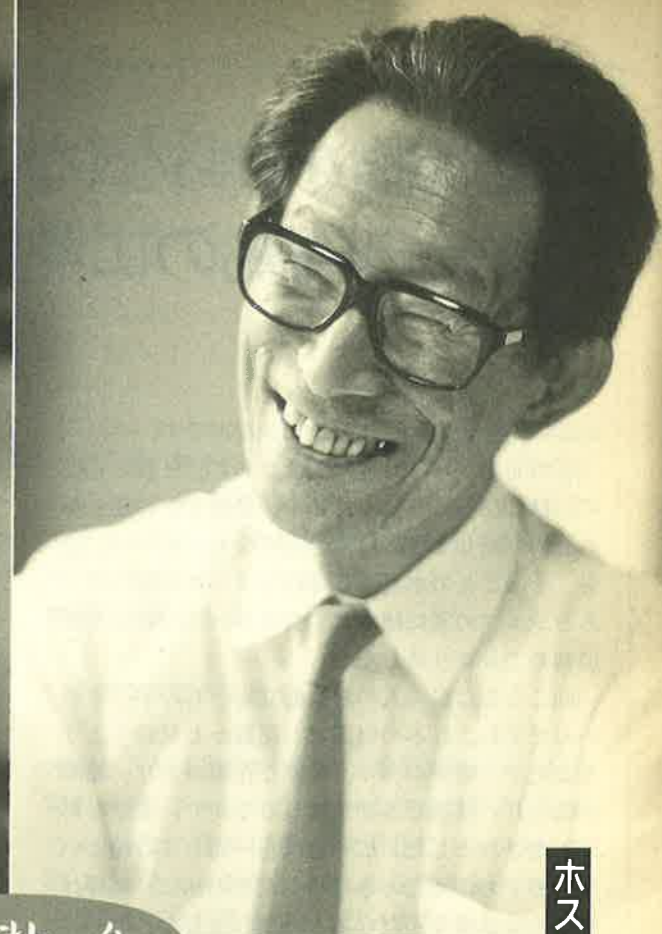
ひとときトーク

「これでいい？ 京都のごみ」というタイトルで「京都民報」紙に掲載された料理研究家・陣内十三子さんの文章は、ロンドン、ベルリン、北欧で見たゴミ箱と京都で見かけるゴミ箱を比べて、簡潔に「文化の程度をはかるゴミ」を言い当てていました。これは是非とも陣内さんのご意見を拝聴したいと、上京区のご自宅を訪ねました。

「食」は文化、料理は総合芸術

木原 今日生協のめざす「よりよい生活」の基本となる衣食住の「食」についての先生のご意見と、ゴミ問題についてのご意見を拝聴したく伺いました。もっとも私はおいしいものが大好きです（笑）、個人的な食指も動いてお邪魔したようなしだいです。

私のいじましさはともあれ（笑）、「食」という



ホスト

京都府生協連会長

木原正雄

ものは「文化」だと、私は常々考えているんです。先生のご著作（『柳川の料理』）を拝読しましたが、そこでも「そこには古くから江戸や京都とのかかわりのなかで、生活に根ざした豊かな食文化が生まれ、多くの郷土料理が伝えられてきました。しかし戦後は味の欧米化とともに企業化がすすみ、いつしか郷土色がうすれて忘れかけたものが多いなっています」と書かれていますね。

先生はいつごろからこうした問題意識をもって料理に取り組んでこられたのですか？

陣内 私もとにかく食べることが好きで（笑）、そこがスタートなんです。子どもの頃から奇妙奇天烈なものを作ってみたりして…。まさか仕事にするととは思わなかったのですが、やっているうちにどんどん興味が湧いて、女子大（日本女子大学家政学部）に入って勉強しているときに、素晴

食べ物を作らなくなっていることで 失っているものに熱い目を——陣内

らしい先生に出会うことができました。

その先生から「料理は芸術である」と教えられて、私はびっくりしたんです。絵画とか音楽とかの芸術と同じように料理も芸術なんだと——。でも、そのことの本当の意味はフランスに行って、あるシェフの家に招かれて食事をいただいたときに初めて分かりました。

向こうでは料理人の社会的立場がものすごく高いんですね。日本の財閥のお屋敷かと見紛うような邸宅で、暖炉があり、豪華な花園があり、絵画が飾られ、快適な音楽が流れるなかで、素敵な料理が出されました。広い庭園を一周して心地よい空腹感をおぼえたとき口にしたその味に、料理は総合的な芸術なんだなあと感激しました。

本当においしいものは？

木原 出される料理だけでなく、そうした雰囲気のもとで「食する」ということですね。本当に立

派な文化であり、芸術だと思います。

日本でも最近「グルメ」が流行っていますが、私は非常に疑問を持っています。第一、旬のものが無くなりましたね。で、野菜や魚ひとつとつてもまぶくなったように思えます。

陣内 おっしゃるとおりですね。物資は豊富なんですけど、昔からの食文化がなくなって、日本独特のものがなくなってしまっていると思います。

私は食べ物を通して世界の国々を見て歩いているんですが、レニングラードからフィンランドまでの国際列車に乗ったとき、面白い体験をしました。ホテルで用意されたお弁当が出たのですが、ちょっと食べる気がしないようなものだったんです。もう見かけが悪くて（笑）。オレンジが入っていたんですが、みなさん捨てていました。私は何でも試してみる方ですから（笑）食べたんですが、そしたらおいしいんです。本当においしいものって、外見ではないんですよ。キュウリにしても二つにぶった切ったような料理の仕方でしたが、これもすごくおいしいんですね。

こういうことは、どこの国でもありました。でも今の日本では、それがなくなって、例えばトマトなんて本当に変わりました。香りも薄れましたし、煮ればすっぱくなるし、色も変わりましたね。

木原 いろんな国の料理や、いろんな食べ物の氾濫する日本ですが、本当のおいしさ、日本特有の料理は消えてしまった…。陣内先生が『柳川の料理』を書かれたのも、そうした日本のあり方に警鐘を鳴らしてのことだったんですね。少し話は変わりますが、ふるさとの柳川の料理と京料理と比べると、どんなふうに文化が違いますか？

陣内 やはり、そこで採れるものが食文化の違いとなりますね。柳川の場合は有明海の魚や貝がいっぱいありますから、それが中心になります。私、京都に来てびっくりしたのは、アサリ汁ですね。柳川ではアサリがお碗に山のように積まれて、汁が底のほうにある、というのがアサリ汁なんです。

ゴミとして「捨てる」生活も 根っこは同じですね——木原

京都はお汁がいっぱいで、アサリは底のほうにチラホラとある（笑）。

木原 うらやましいですね（笑）。私は京都市内で育ったのですが、お刺し身なんか食べられるのは月に2回、1日と15日と決まっていた。おかずは大根とお揚げ（笑）。

食べ物を作ることに熱い目を

陣内 やっぱり、京都だなと思ったのは名前ですね。卵のおつゆのことを「玉水」と言うでしょう。すごい名前ですね。やっぱり文化の都市だと思います（笑）。

木原 これは私が高知の大学におりましたときの話ですが、調理の先生が「この頃の学生は鯛を料理するときに血を見て卒倒するんですよ」とおっしゃっていました。普段、家で魚に触ったこともないんでしょうねえ。野菜にしても調理済みのものが出回ったりで、手間をかけて料理することがなくなってきました。そうやって、昔からの日本独特の料理が消えていくんだと思いますね。

陣内 時間の使い方、家で時間をかけて料理するというところに価値を見いださなくなっているという面があると思うんです。仕事を持っていたら、つい舟に乗ったお刺し身を買ってくることになって、そのあとトレーを捨てて、ゴミが増えるという循環（笑）。

木原 確かにそれはあると思うんですが、基本的に「貧しさ」があるのではないかと思いますね。金銭的な貧しさと同時に精神的な貧しさもあるのではないのでしょうか。私、手間をかけた料理はやろうと思ったら、それくらいの時間をつくれると思うんですよ。

陣内 そうなんです。私はそうやってきました。朝、下ごしらえして仕事に行って、帰ってきてから仕上げればいいことですからねえ。生協でも、ちょっと手を加えたら食べられるようなものが増

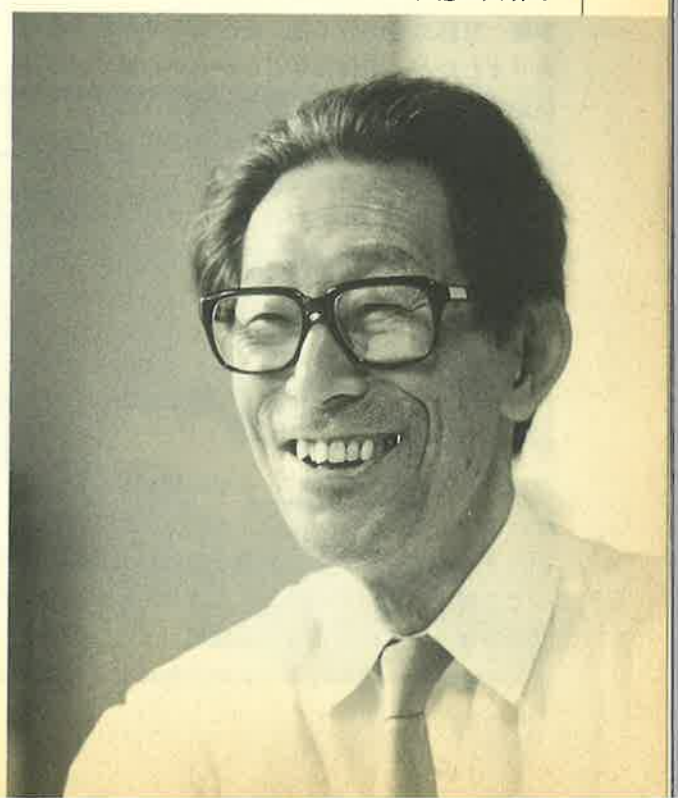
えているでしょう。それはそれで必要なんですが、食べ物を作らなくなっていること、そのことによって失っているものについて、ちょっと立ち止まってみる、みんなが熱い目を向けるような時代がきてほしいと思うんです。

木原 同感ですね。

自然な状態のリサイクル

木原 さきほど簡単に便利な調理済みのパック商品の話から、トレーというゴミの話が出ましたが、ゴミ問題というのも根っこは一緒で、よりよい生活はどうあるべきかということを考えなければならないところにきていると思います。

陣内 私は田舎にいるとき、自分の料理に使うものを畑で自分で作っていたんです。そのために堆肥も作りました。台所の厨芥（ちゅうかい）とか落ち葉とかで堆肥を作ったら、近所のお百姓さんよりうまくできるんです。あのとき堆肥の大切さ



協同組合の役割とは…

'91国際協同組合デー京都集会ひらく

がしみじみと分かりました。今度、東ヨーロッパを旅行していて、向こうの田んぼを見てきたんですが、堆肥が積んでありましてね、ものすごく田んぼが立派で嬉しかったですね。日本の農家に見てもらいたいと思いました。

ふるさとの柳川でも、かつては堀割のどぶさらいを周辺の住民がやって、さらった泥は全部、畑に持っていきました。完全なリサイクルですね。ついでに魚はとれるし、堀割はきれいになって船が通れるしと、ごく自然な状態でリサイクルされていました。

それから戦前の話ですが、近所の農家が肥やしを取りにきてくれて、その引き換えにもち米をくれたんです。だから年末にもち米だけは買ったことがなくて、狭い家の中いっぱいにつきたてのお餅を広げていました。自分の体から出ていった、自分にとっては「よくない」ものが、「いいもの」として返ってくるという素晴らしいリサイクルだったと思います。

リサイクル以前の捨てない生活へ

木原 京都にもかつては、そうしたリサイクルがありました。昭和10年ごろから中心部では水洗化が始まり、周辺のお百姓さんが汲み取りにきてくれることはなくなりましたね。家庭から出るゴミが食生活、食文化の変化のなかでトレーにとって代わりリサイクルされなくなってしまっている…。何もすべて昔に戻れとは言いませんが、考えさせられるものがあります。

京都の生協でもゴミを半減しようということで運動しているのですが、ゴミとして「捨てる」という生活のあり方を考えることが大事だと、私は思っているんです。

陣内 私、ミキサーを17～8年間使っていたんです。とても使いやすいミキサーだったんですが、パッキンが切れたので電気屋さんに行ったら「いつごろ買ったんですか？」とあきれた顔をされて、「ありません」の一言です。結局、まだまだ使えたんですが、一枚の薄いゴムのためにゴミになっ

てしまいました。最近は何でも数年でモデルチェンジしてしまいますね。私、ああいうやり方って頭にくるんです(笑)。せめて基本的なものは共通して使えるようにするとかのシステムを企業に求めたいし、そうさせる力がほしいですね。

木原 日本の場合、それが特にひどいですね。大量に生産して大量に消費させる仕組みを何とかしないとイケない。そして消費者の側も「捨てない」「いつまでも使う」という生活スタイルが必要ということですね。

陣内 フランスの話なんですけど、100年経ったシートをお客に敷いてくれて「大おばあさんが敷いていたシートで一番大切なものだから、あなたに…」と言うんです。日本ではちょっと考えられませんね。ツギを当てたり、両脇を縫い合わせたりしたのですが、とにかく「捨てない」。だからリサイクル以前(笑)。

木原 いいお話ですね。私が一番頭にきているのは「缶」なんです。自動販売機は日本が世界一ですね。そこで販売しているのは「お茶」であつたりするだけでしょう。どれだけ資源とエネルギーを浪費しているか分からない。そういうばかげたことを止めさせていく力を私たちがつけていかなければならないと思います。

陣内 ゴミに埋まってアップアップする状態になってから気がつく…。結局、自分の生活のなかで天に唾したものが返ってきているということなんです。まず「天に唾しない」ことから始めなければいけないと思います。でも、こんな状態になるまで、アッという間でしたね。

木原 ちょうど所得倍増のころからですね。何百年、何千年かかって残してきたものが、数十年で破壊されてしまっているわけです。

陣内 破壊するのは早いんですね。私は、そういう状況を変えていく力、運動の中心としての生協に期待しているんです。

木原 みなさんの協力を得て、何とかしなければいけないと思っています。これからもよろしくお願ひ致します。

7月7日、農業協同組合・漁業協同組合・森林組合・生活協同組合の四者が一堂に会して、'91国際協同組合デー京都集会がひらかれました。世界の歴史的な変動や宇宙規模での環境問題など、激しい転換の波にさらされている今日、協同組合運動もまたどんな形で役割を果たし、私たちの願ひを実現していくのか、危機感を持ちながら模索と続けている中での、京都では昨年ひきつづき第2回目の集会でした。

今回のテーマは環境問題。御挨拶・メッセージ紹介にひきつづいて、嘉田良平・京都大学農学部助教授の記念講演「今日の環境問題と協同組合」をおききました。

みどりが再生するゆえゆたかな地味を持っている(こういう土地は世界の10～20%くらいしかないそうです)日本が、そのもてる資源を放ったらかして荒廃にまかせている現状——森林保全、河川管理、増えつづける耕作放棄農地、コンクリートで固められた都市——。その一方ではがが輸入をして世界の資源の乱獲に寄与しているのです。そんな中で、環境・生態系との調和を柱とし

た持続型農業・漁業・林業の途をもとめることが不可避だし、そのために生産者と消費者、都市と農山漁村との交流、協同組合間の理解と提携は非常に重要な役割を持っている、と語られました。

つづいて各協同組合から「環境問題と私たち」という報告があり、上流部のヤマを守り育てる仕事、農村地域での安心できるたべものの生産と水を守る運動、都市の消費者のくらしの中での回収・リサイクル運動、そして表面おだやかにひろがりながらその中に多くの生命をはぐくむ海をどう深く大切にしていくか——私たちの京都が、都市部と、さまざまな生産の分野をひろく持っている地域であること、お互の仕事とくらしの場はちがいがながらそれぞれが流れのようにつながりあっていることを、美感をもって受けとめられる報告でした。

来年'92年は、ICA東京大会を目前にひかえての日程になります。一層の理解と協同が進展することを大切にしていきたいものです。

(京都府生協連理事・末川千穂子)



減らそうゴミ・広げようリサイクル

●「ゴミ半減化のための討論集会」開催

京都府生協連は、10月1日、生協強化月間、リサイクル月間記念「ゴミ半減化のための討論集会」をコープ・イン・京都で開催しました。

この会は、6月5日に開催したフォーラム「減らそうゴミ・広げようリサイクル—生協に何ができるか」をうけてゴミ半減化への行動計画をまとめるためのシンポジウムとして開かれたものです。

最初に、京都生協環境・リサイクル政策担当・藤本宏美氏の「京都府内44自治体の清掃行政調査報告」があり、つづいて自治労連現業評議会副議長・山下明生氏の「京都府内44自治体ゴミ・清掃問題住民アンケート結果報告」と京都市職労清掃支部副支部長・平野富雄氏より「京都市民のゴミアンケート報告」がありました。

この報告では、ゴミに対する住民の関心の高さとリサイクルに対しても協力、参加希望者が多いことなどが報告されました。

また、原強京都府連常務理事の「ヨーロッパのゴミ・リサイクル調査ツアーに参加して」の特別



報告では、ヨーロッパでは排出段階でゴミの分別を徹底し、処理の第一段階では選別に重点が置かれ、ゴミを減らす努力をはじめ、社会経済システムの一部としてさまざまなクリーン・テクノロジーの開発がすすめられていると報告されました。

最後に、ゴミ半減化のためにそれぞれの立場を理解しながら、共同していくことを確認し、終了しました。

タイ協同組合女性代表団と交流

7月4日、雨の京都にタイの協同組合から五人の代表団をお迎えしました。その中のお二人と御一緒に京都生協西賀茂組合員センターへ。まず店内のご案内です。集会室・調理室・文庫等・組合員活動の場も見させていただきました。質問は主に事業内容に集中。年間・月間及び1日の利用高は？ 職員数は？ 店内のNB商品は一般のスーパーと比べて安価なの？ 周辺の店との競合はあるの？ 等々。店長が数値できっちりお答えしました。サミットバックと買物袋（布製）をお土産に次は上北支部へご案内です。

共同購入班の活動は、すでに配達終了の時間帯。やむなく支部の倉庫・事務所等を見ていただき、集会室でお茶と御菓子で交流しました。組合員とお互いの生協活動への思い等、国境を越えてなごやかなひとときが過ぎました。回収



された牛乳パックの山を見て、すかさず「リサイクル!!」の一声もありました。記念に友禅模様のお箸と箸箱をプレゼントしました。

タイには日本の大手スーパー、デパートの進出で、センターの生鮮野菜・フルーツ等は馴染みの物ばかりとか。一向にやみそうにない雨空がうらめしく、せめて滞在される残り4日間が天候に恵まれます様にと願って宿舍までお送りいたしました。（京都生協上北支部・小林良子）

●京都府生協連設立40周年記念

国際シンポジウム

「環境問題—アジアと日本」を開催



コメンター宮本憲一氏（大阪市立大学教授）



韓国からの報告／アジア環境委員会の設立を提案／金政炫氏（慶熙大学教授）
マレーシアからの報告／数々の環境破壊をスライドで紹介／レオン・ユー・クワン氏（マレーシア科学大学助教授）
日弁連公害委員会からの報告
寺田武彦氏（弁護士）

アジアの一員として、私たち日本の消費者に何ができるのかを考えあおうと、京都府生協連が主催した国際シンポジウム「環境問題—アジアと日本」が、10月5日、京都会館会議場で開かれました。

韓国、マレーシア、日本弁護士連合会公害委員会からの3つの報告では、貧困のために資源を輸出し、環境基準を緩めても公害・環境破壊企業を受け入れざるを得ないアジアの途上国の現状が語

られました。これらの問題解決にむけて国際援助、内発的発展のありかたが問われ、民間レベルでの「アジア環境委員会」の設立が提起されました。さらに、植田和弘氏（京都大学助教授）、リム・フィジャン氏（国連地域開発センター）がコメントしたあと、約110人の参加者をまじえて討論。12月にタイで開かれる「アジア環境会議」、「国連環境会議」（92年6月、ブラジル）にむけてとりくみをすすめることにしました。

高齢者事業団の活動を

京都高齢者事業団をご存知ですか？

最近、生協でよく聞く名前です。

60才以上の方々約200名が退職後の職場として、主に京都市の公共施設の清掃を請け負っています。公園・駐輪場・河川敷き・市営住宅や学校のトイレなどグループを組んで、1ヶ月に1、2回清掃作業にあたっています。

最近、清掃だけでなく京都生協の発泡スチロール回収を請け負い、また10月から同じく京都生協との事業間提携にもとづき、滋賀県栗東町の物流センターの業務を引き受け、リサイクルからまちづくりまでを協同してすすめていくことを合意しました。

今日は、私達が日常的に利用している駅の駐輪場と市民の憩いの場所、公園、河川敷の清掃作業を追いながら、事業団の活動を紹介し、ゴミについても考えたいと思います。10月の秋日和、公園

の清掃について行きました。ゴミ箱はどれも満杯で、なかにはその回りにゴミが積んであります。公園で出るゴミはジュース缶やお菓子袋などわずかな量ですが、大半は家庭の生ゴミで、通りすがりの人や近所の人がすてに来るそうです。「家庭ゴミを捨てないで下さい！」の注意書きにもかかわらず、年々増え続け、それとともにゴミの量も倍増しています。またベッドやフトン、テレビなどの大型ゴミや家畜の死骸から犬やネコも捨てられ、飼い主探しの苦労話もめずらしくありません。

竹ぼうきで掃いてみましたが、15分程で手に水ぶくれができ、腕がしびれてきました。61才から75才までの男性がこの作業にあたっておられました。1日5、6ヶ所の公園清掃は、かなりの重労働です。

京都駅の八条口駐輪場に行きました。

長期間放置されている自転車や自転車の上に自

追ってー。

転車が置いてあったり、倒れたままになっているのも目につきます。自転車の出入も困難な場所に、ジュース缶や雑誌などのゴミが散乱し、不潔な感じを与えます。

自転車のあい間をぬっての作業は、手間がかかり、その上、作業中も自転車の出入が激しいので、思うように仕事ははかどりません。清掃から一週間後、駐輪場に行きましたが、元どおりのゴミの山と乱雑に置かれた自転車に、がっかりしました。

京都駅は京都の玄関口、そして京都を代表する鴨川にも、同じようにゴミが散乱していました。どうしてこんなきれいな場所にゴミをすてる気になるんだろうと思いつつも、その美しい景色と流れにみとれてしまいました。今出川附近にある高瀬川取水口には、上から流れてきたゴミが藻にからみついて、流れのじゃまをしています。川の中へ入って膝の上まで水につかりゴミを取り除く



公園の清掃作業にご一緒した高齢者事業団のみなさん

のですが、冬は冷たくつらい仕事です。

ここでもジュース缶が川の中や河川敷きですてられ、モラルの低さを物語っていましたが、ゴミ箱の数が少ないのとお粗末さに納得しました。

事業団の方々と一緒に、社会の一員としての自分自身の行動を再点検する機会にめぐまれ、考えさせられることも多いルポでした。

まだまだお若くて、働く意欲をお持ちのみなさん！ 1日でも長く働き続け、つちかわれてきた豊かな経験と能力がさらに発揮できるようお元気で仕事を続けて下さい。

(増田隆子)



鴨川の取水口 藻にからまった種々のゴミ



「家庭のゴミ捨てないで」の注意書き



ひざの上まで水につかった作業一冬はつらい！



5つ目の公園でゴミが満杯になりました



白い袋は家庭の生ゴミです



落葉の季節は、通常の倍の時間がかかります



今日は、大型ゴミはありませんでした

協同組合とは何か

●運動・目的・事業●

協同組合は、一定の目的を実現するために、生産、流通、サービスにかかわって何らかの経済活動をおこなっている人びとの集団です。社会的目的を実現するために活動する人びとの集団を運動体といいます。

運動・目的・事業

運動は、目的とそれを実現するための手段とに分けることができます。協同組合では、目的は組合員の利益、手段は事業です。ここでは、一定の目的と計画とに基づいておこなわれる経済的活動のことを事業といいます。協同組合では、経済活動はあくまでも手段です。ここに株式会社との決定的な違いがあります。株式会社では、利潤獲得とか組織自体の存続とか言われているように、経済活動そのものが目的です。株式会社と協同組合では、まず目的が違います。

事業の自己目的化

ところで、組合員の利益といっても、組合員の関心もっぱら利用高配当や出資配当のようなものに向かうと、協同組合でも剰余を確保することだけが目的のようになってしまいます。これが事業の自己目的化です。もちろん、利用高配当や出資配当が協同組合にふさわしくないというわけではありません。組合員の利用や運営参加をとまわらない、単なる便宜提供になってしまっていることが問題なのです。協同組合が株式会社と同じ目的で事業を展開したとしても、組合員にとって何のメリットもありません。もちろん、株式会社との競争に生き残ることができるという保証もありません。

ヨーロッパ生協運動の危機の背景

最近、ヨーロッパにおける生協運動の危機が伝えられています。その原因はこの事業の自己目的化にあったようです。ヨーロッパの生協が、利用高配当や出資配当以外に、これといったメリットを組合員に提起できなかったことがその背景にあったと思われます。ヨーロッパの生協は、1950・60年代のライフスタイルの変化をつかみそこねて組合員ニーズへの対応が遅れ、そのために株式会社を追いついて、ほとんど同じ目的、同じ条件で「流通革命」をめぐる激しい競争に参加しなければなりません。こうして、組合員の生協離れや経営危機が進行していったのです。協同組合らしい目的を失ったとき、協同組合は協同組合でなくなってしまうのです。

人間的欲求と能力の発達

組合員のニーズは具体的です。しかし、協同組合が実現をめざす組合員のニーズは、安全な商品や共同購入の利便性といった直接的利益にかぎられません。同時に、利用や運営参加を通じて獲得される、人間的欲求と能力の発達も重要です。人間的欲求も発達します。また人間的欲求の発達なしには、能力の発達もありません。そのためにも、自立、連帯、創造性、経営・管理力の実現といったより普遍的な目標が重要になってきます。協同組合は、組合員一人ひとりが人間的欲求と能力を発達させることによって目的を実現しようという組織なのです。

民主主義と効率

協同組合では、事業は手段ですが、単なる手段ではありません。目的が民主主義的であれば手段も民主主義的でなければなりません。そうでなければ、いつかかならず目的は手段に裏切られることになります。しかし、目的を実現するためには効率も必要です。利用できるものは手段として徹底的に利用するのが効率です。したがって、効率を高めようとして民主主義を後退させてしまうこともあります。たえず「民主主義と効率のバランス」に努めることが必要なのはこのためです。

これまで、さまざまな思想家が協同組合を、公平で豊かな将来社会のモデルと考えてきました。これは、彼らが「民主主義と効率のバランス」に協同組合の本質を見ていたからにはほかなりません。

社会的対効力

ところで、よく「事業と運動の統一」といわれますが、この運動という言葉は消費者運動や農民運動の意味で使われているようです。つまり、組合員要求を実現するためには経済活動だけでは不十分なので、制度改革が避けられないが、そのためにも他の運動団体との提携が必要だということです。たしかに、協同組合の経済活動には限界があります。

協同組合のことを社会的対効力（カウンター・パワー）ということがあります。たとえば、生協は市場で弱い立場にある消費者の経済的地位を強化するための社会的対効力だといえます⁽¹⁾。これは単純に事業規模の問題ではありません。「安心安全」をコンセプトとしたコープ商品の開発、告発、ボイコット、裁判などさまざまな大衆運動、労働組合や他の市民運動との共闘という、いわば総合力にたいする評価なのです。これからは、総合力がますます必要とされる時代で



速く力強い筆運びは努力と熱意を、左右に開いた構図は加盟メンバー6億組合員を有し、その歴史と伝統を誇る国際協同組合同盟を表わしています。デザイン全体では21世紀に向かって環境破壊や貧困と戦い、平和と人間を尊重する社会づくりをめざすICAの創意を象徴します。

はないかと思われれます。

事業の経済合理性

ところで、きびしい競争に直面したときに保守的になったり内向きになったりするのには協同組合でも同じです。いつも正しい対応ができるとはかぎりません。そのときの対応が、経営効率の改善に役立たない場合もあります。合理化の結果ではなく、合理性に欠けていたために、民主主義を後退させてしまったということがあります。ところが、民主主義の問題ほどには経済合理性の問題にたいして関心を払わない傾向が、とくに組合員にはつよいようです。協同組合にふさわしい事業のあり方を追求するためには、組合員や職員が事業経営の実態に触れて、合理性に欠ける点については是正することができるようにすることが必要です。

なお、これとは別に、経営の合理化をチェックする独自のシステムも必要でしょう。

人間的要素

協同組合の事業は単なる手段ではありません。人間的欲求と能力の発達を目的とする以上、手段も人間的で教育的でなければならないのです。協同組合では、とくに人間的要素が重要なのです。

(京都府立大学講師・嶋信樹)

(注) たとえば、1976年に閣議決定された『昭和50年代前期経済計画』参照。



水色の
ナース服で
走っています

患者・家族と手をつないで

●訪問看護を年間のべ600回

向日市、乙訓医療生協医誠会診療所の玄関口には今朝も早くから患者さんが待っています。朝9時、受付け開始。待合室では、ひとしきりにぎやかなおしゃべりが続きます。

受付のあわただしい中、電話が鳴りひびき、Kさん(74才)の奥さんから、「Kですが、今朝4時頃から胸がしんどい言うてます…」とあわてて要領を得ない電話が入りました。Kさんは、脳梗塞と糖尿病でほとんどねたきりの患者さんです。当院では、午後に往診や訪問看護を行っています。午後まで待てそうにないと判断し、とりあえず様子を見に訪問することにしました。症状を聞き、脈や血圧を測り、からだのあちこちを観察し、対応を判断してから診療所へもどり、医師に症状を報告し、指示を受けます。夕方、医師が往診し、翌朝7時半、朝食前(空腹時)の血液検査のために、再び看護婦が訪問します。この早朝訪問は、朝食時間を定時にしたいがためのKさんの要求です。又、Kさんは話し好きです。時には、ゆっくりと話につきあうこともあります。

乙訓医療生協が、「訪問看護」を日常業務の中に位置づけ、未熟であっても、とにかく地域へ足を踏み出そうと出発したのは、昨年4月でした。今、高齢者問題は深刻で、どの年代の人も、「老

後生活に不安を感じる」のは圧倒的に多く、中でも寝たきりや痴呆になった時がトップだそうです。私達は、在宅のねたきり患者さんや、それに近い状態の患者さん、又、癌末期の患者さんも訪問しています。「住みなれた自分の家で人生の最後をすごしたい」と願う患者さん。その思いを必死で受けとめ、「本人の思うようにさせてやりたい」と覚悟を決めた家族。私たち医師も看護婦も事務職も、同じ様に覚悟を決めなければなりません。休日、深夜、いつでも飛び出せるようにし、互に支え合い、励ましあって、出来るだけ患者の近い所にあつて援助したいと思っています。しかし、まだまだ技術的にも不十分で、納得いく内容ではありませんが、組合員さんから喜ばれているということに自信をもって、少しずつ前進したいと願っています。

昨春から一年間に、38人の患者さんに延600回余りの訪問看護を行い、自宅で最後を看とった方も数人おられます。現在、103才のおばあちゃんを最高齢に、20人の患者さんを訪問しています。乙訓の地で、水色のナース服で走る姿を見かけられたら、どうか御声援下さい。”がんばれヨー”と。

(乙訓医療生活協同組合・山本朝榮)

「高齢者眼科検診制度の実現をめざす会」が発足

9月30日、「市費による高齢者眼科検診制度の実現をめざす会」発会の集いが、京都朝日会館9階ホールで開かれました。

この会は、1989年に京都医療生協より提唱され、今春開かれた賛同者会議により結成することを求められていたものです。

まず、京都医療生協組合長の中野信夫氏のあいさつのもと、眼科医の山田亮三先生による「高齢者眼科検診の大切な意義」の話があり、放置すれば失明に至る緑内障を中心に説明されました。

高齢者の眼科検診は、緑内障や白内障の発見と失明予防に貢献するだけでなく、動脈硬化症や糖尿病などの発見や病後の経過判定に役立ち、健やかな老後を楽しむための有力な手段といわれています。京都市の基本検診と同様、眼科の検査も市費でできるようにとの声が高まっています。



「市費による高齢者眼科検診制度の実現をめざす会」の発足会

当面の活動についての提案に対しては、老人クラブの代表などからも積極的な意見が出され、取り組みとして①京都市会への請願署名②団体、個人に「会」への加入をすすめることを確認して会議を終えました。

(京都医療生活協同組合・山内博貴)

京都生協男山組合員センターが改装オープン

9月12日、京都生協男山センターが改装オープンしました。これまでの「狭く暗く不便」から一転して広く明るい店内は工夫も凝らされゆったりと楽しみながら買い物ができる豊かさを感じさせるスペースです。また6日間にわたる



オープニングは、日替り料理教室、講演会、学習会に加えて室内楽なども。真新しい会場には弦楽の調べが格別に心地よく響き渡ります。さらにセンター横に設けられたリサイクルコーナー。空缶、空びん等の回収量は予想を上回り今後はトレーの回収もあわせて運動は一層広がる見込です。何ととっても若々しいパワーが自慢の男山センター。作業期間中は職員が戸別訪問をして生協への「願い」や「意見」を集めて回るという大作業を展開、その結果集まった貴重な「声」は5600にも及びました。これからはこの「声」を十分に生かしてますます魅力的なセンターを目指します。職員・センター委員ともに、新たな気持ちに戻って再出発です。

(京都生協男山組合員センター改装委員長・須賀佐和子)



第11回'91平和のための京都の戦争展



今年は高校生、中学生の見学者が多く見られました。



京都生協の組合員さんによる合唱



今年は高校生ががんばりました。平和ゼミの一言コーナー

「太平洋戦争」開戦50周年と第11回を迎

「太平洋戦争」開始50周年の日をどう迎えるか。

1941年12月8日、日本はハワイ真珠湾の米軍に先制攻撃をかけ、「太平洋戦争」の口火を切りましたが、来る12月8日は、その50周年の日になります。

また、去る9月18日は、日本が中国への一方的な攻撃を仕掛け、「満州事変」へと突入していった1931年のその日から数えて60周年に当たる日でした。

これらの節目ともいえる日々を、私たちは決して無意識のままに過してはならないと思います。

「満州事変」は、日本が中国の領土の一部である東北地方(旧満州)の占領を企てて起した疑う余地のない侵略行動でした。そしてそれが、1937年からの対中国全面戦争(日中戦争)に拡大し、さらに中国人民の根強い抵抗によって、泥沼の長期戦を余儀なくされ、あげくのはてに無謀にも「太平洋戦争」への突入となり、遂には、1945年8月6日と9日に原爆の被害を受け、8月15日に敗戦という経過をたどったのでした。「満州事変」開始から「太平洋戦争」敗戦までの一連の戦

争状態は、15年の長きにわたり、今日では「15年戦争」と呼ばれています。

毎年8月6日、9日には、私たちは原爆の恐ろしさや、被爆者への思いをこめて、核兵器のない地球を念じ、ふたたび被爆者をつくってはならないと誓いあってきました。同じように、「太平洋戦争」開始50周年の日である12月6日には、「太平洋戦争」をふくむ「15年戦争」について、その真実を見つめ、心に刻み、誓いを新たにしたいと思うのです。

京都の生協で平和活動が組織的に取り組まれるようになって、およそ10年になります。この間、平和行進、原水爆禁止世界大会や「生協の集い」、「平和のための京都の戦争展」や地域でのミニ戦争展などなど、多様な取り組みが積み重ねられてきました。とりわけ、平和行進や「戦争展」では、生協の活動は重要な貢献をしてきました。平和行進では、被爆国の国民としての立場から、また「戦争展」では、銃後の生活の苦しみを再現することによって、平和の尊さを訴え続けてきました。しかし、これらは、どちらかという戦争被害者の意識からの訴えであったのではないかと思います。

さきにも述べましたように、「15年戦争」は、

えた「平和のための京都の戦争展」運動

まぎれもない日本の侵略戦争でもありました。必然的に日本は戦争の加害者でもあったといわねばなりません。日本軍は、この戦争で、日本人の死者の何倍ものアジアの人々を殺したという事実を目をつむってはならないのです。1937年12月の南京大虐殺の事実を看過することは許されないのです。これらの「15年戦争」における日本軍の加害の事実の認識と、それらを引き起した侵略戦争に対する誠実な反省をすることこそ、12月6日に最もふさわしいことではないでしょうか。

第11回目を数えた「平和のための戦争展」

「平和のための京都の戦争展」は、1981年の第1回から今年で第11回目を数え、のべ160万人が参観し、京都における平和のイベントとして大きな貢献をしてきました。

この「戦争展」の特徴は、「15年戦争」の真実を、加害と被害の両側面からトータルにとらえて表現してきたことでした。

生協は、最初から積極的にこの運動に参加して、その成功のために尽力してきました。「銃後の生活コーナー」を担当しては、戦時下の家庭生活を

セットで再現し、紙芝居や戦時食の試食など創意ある展示をしてきました。また、会場内の「食堂」を担当し、その収益を生協の組織的カンパに加えて、財政的にも貢献してきました。

また、毎年多くの組合員が要員として参加し、その運営を支えてきたことを評価しなければなりません。なぜなら、要員として参加することによって、組合員の一人ひとりが戦争と平和に対する意識を大きく成長させたにちがいないからです。

このようにして、年々歳々、府民の期待と要望にこたえて続けられてきた「戦争展」でありましたが、来年度からは、会場確保の見通しの困難などのために、今まで通りの規模での実施があやぶまれています。

しかし、「戦争展」運動の火を絶やすことは許されません。幸い、来年度には念願の「平和祈念博物館」の構想をうけて、立命館大学に「国際平和ミュージアム」が設立されることになりました。私たちは、それとの協力関係を維持しながら、ようやく定着しつつある地域での「ミニ戦争展」運動を一層発展させるために奮闘しようではありませんか。

(京都府生協連副会長・伊吹良太郎)

発泡スチロールトレイ回収運動

中間報告

京都生協はいま、組合員センター（店舗）での青果物40品目ノートレー運動など、包材の簡素化のとりくみを強めています。

こうした中で、この12月1日からは、京都府内30の全組合員センター（30店舗）で、発泡スチロールトレイの回収運動をスタートすることになりました。

省資源や家庭ごみの減量という視点から、プラスチックトレイについては、使用量を削減することが第一義的な課題です。しかし、現状ではやむを得ずトレイを使用する商品がたくさんあります。

この回収運動は、やむを得ず使用した発泡スチロールトレイを回収、再生することを通じ、資源を大切に、ごみの減量に貢献することを目的とします。

これに先立ち、今年の7月1日から8月31日にかけて、烏丸・石田・亀岡・城陽と4つの組合員センターで回収実験を実施しました。

2ヶ月の実験で回収したトレイは105,699枚で、この内、発泡スチロールトレイが97%を占めていました。発泡スチロールトレイの推定回収率は38.8%と、当初考えていた回収量を大幅に上回るものとなりました。また、実験開始の7月より、8月の方が回収量は増えており、トレイ回収に参加する組合員の広がりが感じられました。（8月以降も引続き4店舗で回収を継続します。）

この実験結果から予想する、全組合員センターにおける年間回収枚数は約500万枚です。家庭用

のごみ袋に5~6万袋分あり、重さにすると約15tにもなります。

今年10月に施行された『再生資源の利用促進に関する法律』（通称リサイクル法）を受けて、通産省では、トレイメーカーやトレイのシートメーカーに対して、リサイクルを促進するための働きかけを行っています。発泡スチロールトレイの原反を製造しているメーカーで構成する、発泡スチレンシート工業会では、業界として発泡スチロールのリサイクルにとりくむことを表明しました。10月には兵庫県にリサイクル施設を設置して、兵庫県が推進するトレイ回収や関西一円の回収のとりくみに対応することになっています。

発泡スチロールトレイ回収は、消費者と企業と行政、3者が一体となったとりくみへの展望を膨らませます。しかし、回収・運搬や処理に伴う費用負担は大きく、それぞれがどんな役割分担を果たすのかなど、今後の課題はいくつも残っています。

京都生協では、トレイ回収の他、10月27日から約3ヶ月間、空き缶・空きびんの回収実験を行うことにしています（4組合員センターで実施）。

そして、これらのとりくみは、いずれも京都高齢者事業団との協同組合間協同によるものです。

こうしたとりくみを通じて、広範な人々との協同を実現し、リサイクル型社会に向かって一歩ずつ前進したいと願っています。

（京都生協総合企画室・藤本宏美）



●気になるこの本

読書研究会編

『1800冊の戦争』

——子どもの本を検証する——

かもがわ出版

(1,500円)

寿岳章子

ついせんだって、たしかに「福竜丸」のニュースの一文で、広島大学の学生についてのある事から知った。何と、調査によれば、8月の6、9両日が何の日であるか正確に知っている広大生は30%であるという。仰天した。あの広島、などという嘆きはもはや的外れであるらしい。

大学生とはかくも社会的歴史的認識がないものか、しっかりせい！ と怒ってみたくもなるが、私はこのごろしみじみ思う、いや、その前にもっと責められるべきものがあるのではないか、どうしてそうなの！ といらだつ前に、どうしてそうなったかを考えなくてはなるまいと。

赤ちゃんを抱きしめつつ、この子が大きくなって、戦争がない世の中でありたいと祈りますとつぶやく母の写真を見た。いかにも母ならでの祈りであるが、その祈りだけで戦争は消えるものだろうか。否。では、祈りだけでなく、戦争を避けるさまざまな行動をすべきであるとの判断がついで生ずるだろう。デモをし、集会を組織し、参加する、署名やら何やらする……正しい答えである。しかし、もう一つ大切なことが言われていない。こども自身の戦争に対する生き方の形成についての親の態度が語られてほしい。昨今の世界情勢について考えてみても、いかに人々は組織的にたがいを殺しあうかが身にしみてわかる、しょうがない、戦争は人類の必要悪とあきらめては、それこそ憲法9条に生きる日本人がすたるといふものだ。

私たちは、憲法9条がよりよく作動するためにも、いかにして戦争が具体的におこったか、その本質は何であったかを、今こそあらためて

1800冊の戦争

子どもの本を検証する

読書研究会・編



かもがわ出版

十分に知るべきである。いかに必然的に、あるいは愚劣に、傲慢に戦争が生じたか、その結果いかに無惨きわまる状況が生じたかを、目をそむけずしっかり見きわめたい。

そのためには何と言っても、『1800冊の戦争』のような本がどんなにすばらしい役割を果たすことだろうか。しっかり戦争を見据え、その人間悪に対してどう立ち向かってゆくかを、家族どうして、とりわけ親子の対話で語りあってゆくことこそが、将来の平和を築く礎石となる。平和は誰かにおまかせして達成されるべきものではない。一人一人が、戦争について、具体的に知り、怒り、悲しむところからすべてははじまる。逃げたり、目をそむけたりに終らず、まず直視しよう。その時、この書はとても大切なみちびきの役目を果たす。

大学生協京都事業連合創立30周年記念コンサート

上村 昇 *Noboru Kamimura* 甦るハイドンの息吹

1991年
12|5(木)

開場PM6:30 開演PM7:00

京都会館第1ホール



ソリスト〈チェロ〉：上村 昇

ブラームス
大学祝典
序曲

ハイドン
チェロ協奏曲
第2番

ブラームス
交響曲
第1番

主催/
大学生協京都事業連合
京都市左京区高野玉岡町23-3 ☎(075)711-1117



指揮：高関 健
京都市交響楽団

S ¥4000 A ¥3500 B ¥3000
S ¥7500 A ¥6500 全席指定(男着不可)

チケット前売所：各大学生協プレイガイド、チケットぴあ、チケット・センシ 他 市内有名プレイガイド



安齋育郎・中川順子／監修
京都生活協同組合編
『環境にやさしい暮らしの
アイデア834+1』
かもがわ出版・1,000円

「協同組合の基本的価値」 をめぐる討論集会

日時●11月22日(金) 18:30~21:00

会場●コープ・イン・京都

内容●報告 野村秀和氏
田井修司氏

●討論

主催●京都府生協連

企画●京都生協調査資料室

「環境にやさしい暮らし」
はじめてみませんか。。